西遊雜記 四

薩州豊前之部

和書門 類
一六六〇四 號
二一五 函
九 架
七 冊

内閣文庫
和書 類
一六六〇四 號
七 冊
一七七 函
二二 架

内閣文庫		
番號	和	16604
冊數	7	(4)
函號	177	1135

西遊雑記巻之四

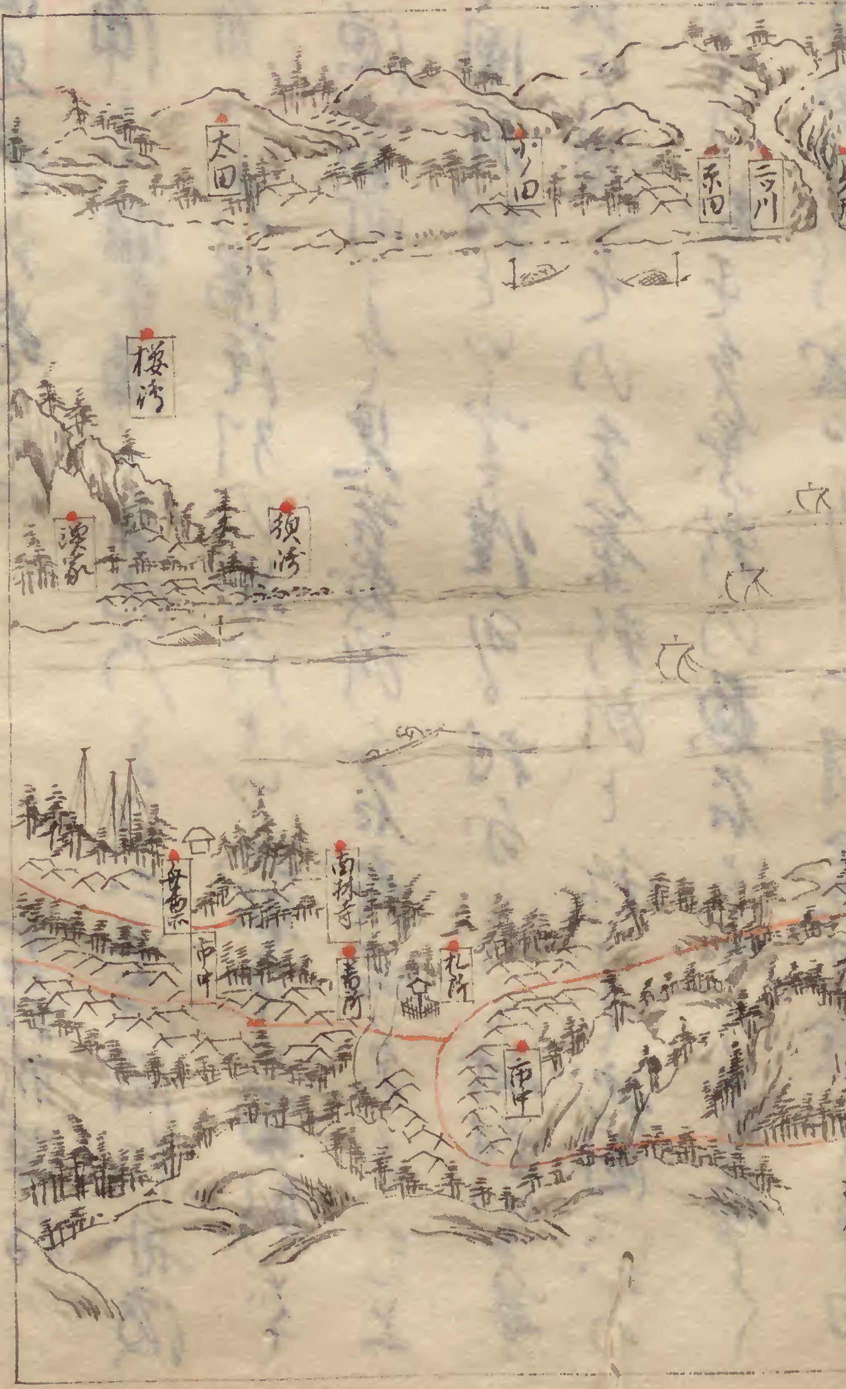
古松軒草稿

加治木浦より脇本浦に至地乃みち二里計間ハ舟渡
の川有り大隅薩州の界川といふ脇本ハ百軒斗
かりの漁家町にて見苦敷所之名産烟草にて是上
品とて国府村といふハ僅成村なれとも此村の多葉
粉薩摩大隅にての名葉粉所と称して他国にしられたり
とかあるゆへ其余も多葉粉の名所と世に広く
の村里ゟ多葉粉出るなし六月十九日嶮しき白
銀坂を越て鹿児島に入る曲道ゟ径四里

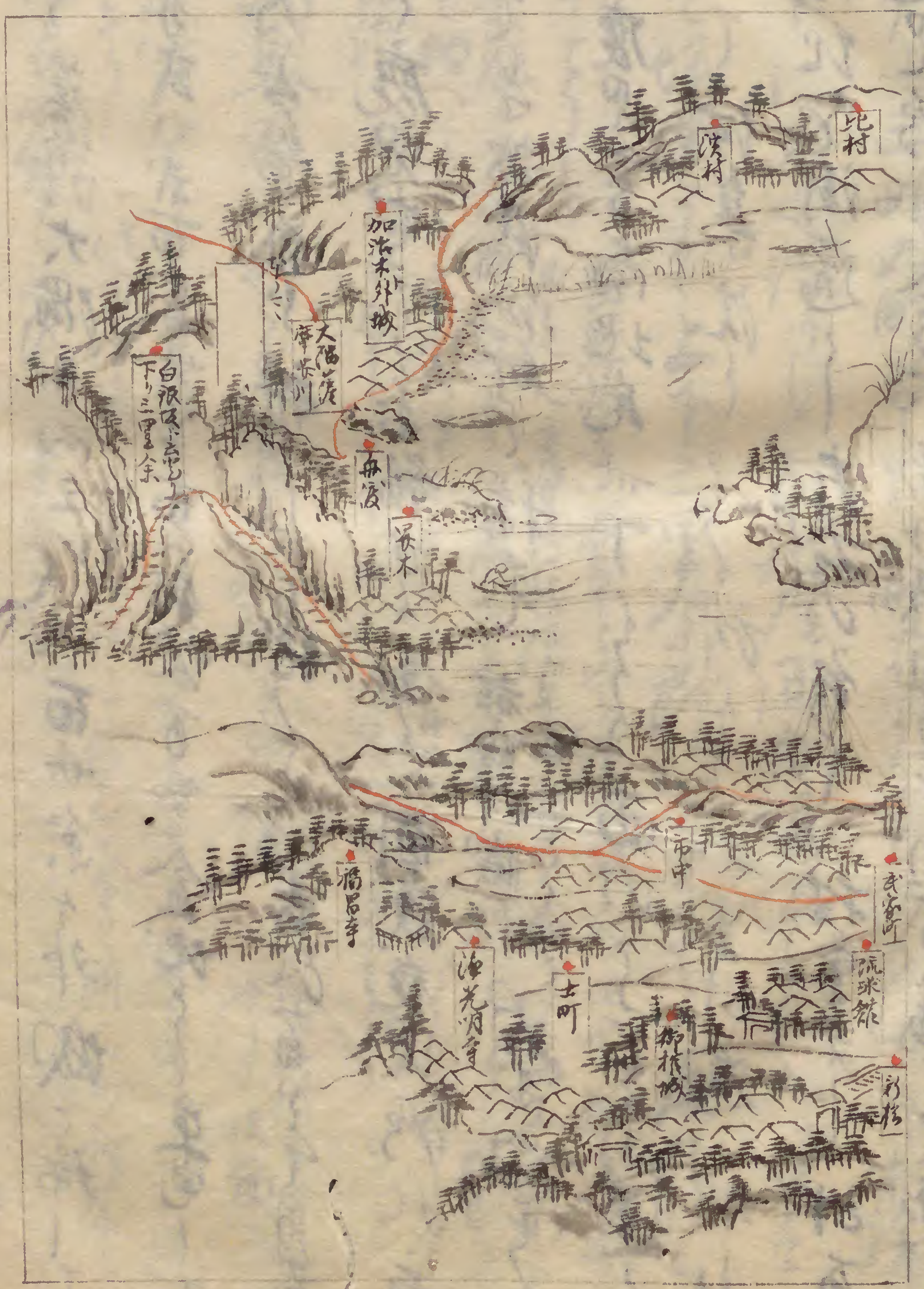
日本政府図書
明治十三年購求
六三八三

貝カ月ヨリ
竹村ヘノ海上
二里計
鹿児嶋ヨリ
桜浜ヘ一里
大隅ノ地
ヨリモ一里

薩摩国鹿児嶋大略之図



是西北ニアタリテ伊集院ト云所アリ行程五里計故ニ伊集院口ト云



薩摩の國ハ鎌倉時代の風俗にして武備れのしき古荒れ
法あり薩州大隅日向三州に百廿余ケ外城と称して
三百家或ハ貳百家或ハ百家許地方を分地として
小給乃士を自ら耕しを祀しに書院有りて月毎
に然く鹿児島より来勤せる事也　國民鹿児島北方
中まで出て都城領町と称せ（都城外城　文字ハかなのこと）右手国ある
所の鹿児島より南北凡廿丁ばかり西の方ハ山連く
として伊集院といへる所より六里計道ハ小山
乃頂迄を御道とし左右の谷ハ小村里多し廿丁
而鹿児島より入る人ハ坂有り東の方ハ海にて西の山

きとより三町五町ほどハ八町ほどもありていつもり市来筋
狭きやうに見へて坂道して東北乃間内根坂より入ル口まで
嶮しき坂道まで上下三里余許にしてハ屏風を
立しかことし
（鹿児島より服部といふ所へ坂ありて四里ほど　曲道し鹿児島より船にて海上を行ハ　寺山まで余程しきり鹿児島より船にて海上を行ハ　白銀坂と云へしより鹿児島より小出手の船ハ　古人の物語とせし彼ゆえの湯に住まいす）
鹿児島要害の如くなれバ上ハ地といふ所へ（市来より嶮しき坂路へ）
とせしに所ハ多くて茶店とて休息して人家もありて退
而とせしに此白銀坂ハ三里の間に休む所も茶店も
稀の坂にて細く荒しき事なり哉
肯付秀吉此國を征し給ひし時より肥後乃出水口

より入り給ひし鹿児嶋より十三里西光河内川と称せ
し所にて薩軍いよ〳〵支へしかとも上方軍勢勝ひつよく
終に島津義弘陣営にあつかひを乞ふ事之秀吉公それより
鹿児嶋を出一統なりて大隅地方かゝら給ふに此白銀
坂は道けはしく此府路律家の院伊集院なりし玄幸と云ひし人
岩石の間に隠れ御して誤絶を歎く秀吉公をうり
あまたも驚きまして伊集院を此の方今伊集院
なりし者思ひ居し山岩を隠れ岩と称して白銀坂乃
坂中にあるに鹿児嶋への入口海なとに宮ありと云
濱道伊集院は大隅口今一里間道あり吉田横川より大隅

薩摩は中央にあつて小なつさる島にして山をなすかんの嶽
とつふ桜島なるもの西あつし漁村数多あるをもつ
其採樹数多ありて其の名高し此故をしりくさ
なつ嶋を称す国守の御茶屋あるなり
此は地皆然面狭き故に此書に略せり外に大島あり此嶋を拡
まて海上を去ること八十里余りと古人云也
安永八年亥の九月朔日より地うごき海底あつて潮
隅乃浦かこしこれいかなるんと浦人さわぎたる
て漁舟に乗りて地方へ逃んとせしに海底より潮を吹
たつる事夥しく舟四方へ走る事此なきも人
かえつは死よまぬがれやまとあつまりて志ますの嶽の頂より南

石を見して旅する事おびたゞしきに北方は漁村を埋し
其占家の死亡せる者百五十二人二の百余人鹿児島
を始め近き所の浦々の人々五三三里逃去りて多人なし
立退く人なかりしかも須海座より古府峡河まで
温泉あり而大小七ッ大なるは周り廿町余小なるも一丁二丁
余りにおよぶ島々と浦人の物語りなり哉

廃帝宝字八年ニ煙気アリテ燃出ヽ事続日本紀ニ見エ
其後くる自然にして入海の眺め勝景の地也古府の
月見は都の光のをかしき桜島の絶えし夕べ河ごと

浄光明寺と云るは小高き所にして境内より桜島を
見渡す風景一しほ絶して此国の風景たぐひなからん
高き所に寓せしかばの国の諸法のかゞみ三條の
松あり　紺外古奇なる跡し
寺院数多ある中にも福昌禅寺と号せるは石屋禅師
の開基國の古代にて此墳墓の地にして大寺なり
寺領千石寄附ありて當院をとりかくて数百年を
経し古跡所とおなじく此墓所と此念のいかし事之
禅堂　諸堂何もの額まで獅子吼と云ふ額字古く筆者
見えず見し事にて人絶へし天井に九龍を画けり

狩野の探幽筆之寂感(?)尼古寺炭師とへ見えて大額を
かけて覚皇宝殿と記し 本堂の額には勅額と計り
有り祖師堂には智日堂といふ額をかけ側に石庵
禅師の伝を挙し碑石建り大いなる碑にて龍亀の
纏(?)にのせたり 山の岩間より龍を彫りて
龍の口より水を注出る 細工目を驚しぬ二王門の前に
大いなる道ありて橋かゝれり 傍に龍の欄の碑と記せ
し碑有り文章甚古く分明ならず 古しへは此所
茂(?)すみて仏法の隆盛せし事跡を示せし碑と云
南林禅寺に詣けるに 石屋禅師の開(?)基にて図の

守護(?)の横巻(?)なりとて大寺あり 紀州公自石寺(?)以(?)寺号を誌す 覚庵
始(?)めまで殊勝に見えたり 本堂は萬禄(?) 焼山(?)
の筆なり 南林寺と大文字の額かゝれり 一しほ見事なり之
禅堂には華人の筆にて木半窓(?)と記し 山門の
額には松原山とありて御堂の前は二王を見たて石仏
にて向ふに云石の中にしたる也 又下きざむ事なく
小寺までも二王なり
其ほとりけ道まで右道まで両(?)側にもまつり南には(?)かかりても
石敢當と記し石を建る事 何故にかれ来りしは
石をまつりかりしみハ建るを古人にもなし 疲病(?)除
のまじなひと云ひきし 出入とて其外のとのへよの之
仏家よりおこりし事にや

琉球舘を一囲にして門番ありて用なく入る事を禁せり
ノおよそ百人ばかりハ鹿児嶋へ渡り居て琉球の産物を貢
貢しまた文書を奉る事すべて何にも日本にて云事をせ
ハ今をつくふといへり田舎なるとも京に出りて諸礼を学ぶ
よって琉球人ハ鹿児嶋へ渡りて学文をし諸礼を習ふ
事なりて和歌をよみ手跡を見事なる琉球人なるあり
天窓を有髪なる小童は髪結ひしやう琉髷を丸て
半分剃して笄をさして振る 家老日本にいふ家老ハ
とし 親方家来ハ紫かふりの冠衣装を好むべし
本を平生ハ衣ありて官服を着て和服なんとも着用にて

人の如し加へて云新ありて琉球に醸ありと記せしも
ひ至たるを
薩州北地より琉球までの海上諸坂ありと称し琉球を
おもふとも実説無し加之今も人の所在山川と
いふ津より南方にあるにて九十島里とも箇所の島々にて
船路にかかるといへども其間に連なる島大小あり多経
を船かかりて港ありて大坂へ往来せる海上よりも
好し薩州大隅の浦々の国守より出船し此船
よりて一年に幾度となく定めて海渡せる
鹿児嶋より古にの人数人琉球の地に渡りて勤番

なる役所もある事にて第一かく生する風もなく 十
余万石薩摩の上納にて過ぐる年の凶作や琉球おびく
早魃して稲熟せず 暖国にて稲は六月に熟せし 土民飢渇せんとせし時
而も薩州倶に救米を渡して救ひし事あり
然るに琉球人日本の風俗を慕ひ薩州に属せんとして
又も中華福建省の地に近くやともすれば福州の
為にあらざる事なるによりて福建省よりも
恵して聘礼まで来る事也 薩州より知りても知らぬ躰
して見まで承知して云く薩摩の右衛門のやうに
以前より琉球の南さき湾をふかに造りなり

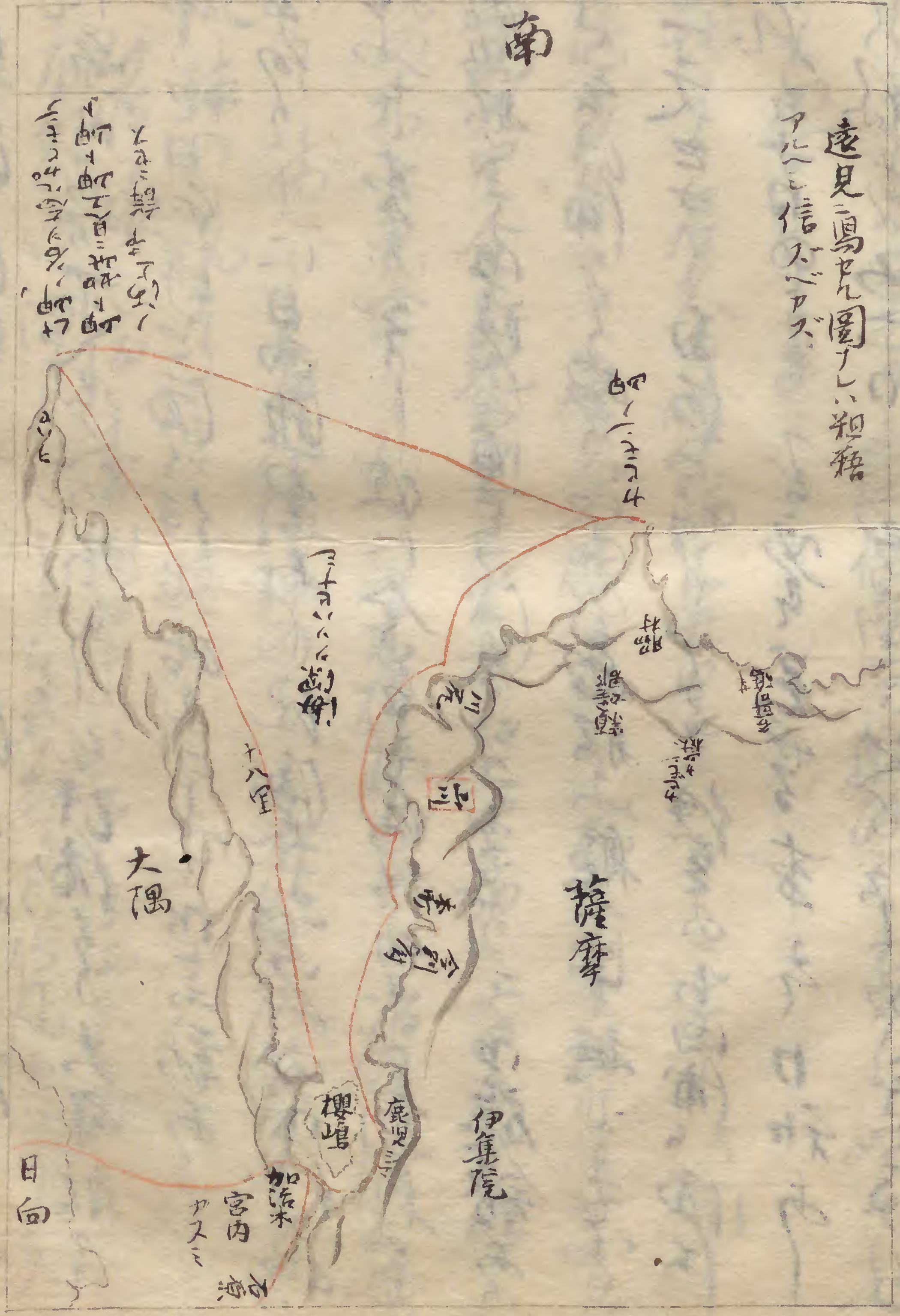
とかく琉球の一件救米あるにいとまあらず薩州の地は
都より人に僅なる人の物語りを考ふるに
薩州は武風を見るに諸々の逆風なりて何にかも
東都に無く度々無事して上方筋の風俗を見て士氏
中国筋は士風といへども武かざりし事も何もされ
ども外職の器用して薩州の地をも考ふる士気
もいまだ体にあらず長き刀にて
らんじん頼き衿まで言語も其なまりにて解りし
いかにも古しへの武士は如何にも風俗をも強要しやう之
秀吉公より此事も末々まで引き続きも本朝の

然ひでも薩州軍兵と称ずる族くしてきくなき貢をと
せまて士之外割当てことそりなる事と本國し百姓余分職
なく兵士振三万余人石九十石取之士之外しく自ら耕
して作り取となる時ハ中者馬を所しなる事三人とある
者自由ニ常を逸せ外祢之大小実とかりく己を着し兼
合をいとよなよふ宗なるとの上下貴賤の武風も質して
平士の男子ども十人ふ七八人まで其紀を合し居なく若
て学や篭し者達は都く宏くなく其一武辨なし
さいなら行りんと教無し如なる風俗なる薩州を海国
西南のはしなて地の理要国そし兼害いとんなる

なし島津家数代地を如く従えをもさとこともなくなる事に
なくも勝地をなる所もいふ所し志の有ともも辺鄙なる
地に婦人の風俗さへいとなし其言語も聞なるなく
所なりの唯乃語も音田元所甚解し難し中にも中に
おゐても一種なる言葉し中ても服装をトウツリと
称する事まて勝の者の服さしなとも以て兵士人ハ
一向に知らぬ事之先は皆御僻地なると知べし

世にいふ薩摩州の士百石以上の士衆野人なるもの事に付
せる事故に士人ハ尋常にして批して諸家も福島等也
強借り知者なりし所所計一皆をかしに三百石知行
高なりして七人なりとみて士官も姓名等し加きて山家ノと
称せる者島津家にて百石以上の家なくしく政道堅強の事
みな切らず候しく中華の武者に同一し政事の

事ハ百石以下の者ある士を撰りて許り執行ふ事も島津家
の定法とそ云り
世の新法に変れん様なるらし故隠謀あらば死をまぬかれ
薩州に忍ひ入り島津家の奇さけなりとて門従家の寺
いつきそ一生安身にせをかくり寝ひ子孫今にありと云ふ事
廣流といふ人ありりき渡る勢ひを家加しこれそさる
必し所まりくの流のまましく続あり定まりてあるん
と去にのせ候



山川乃津は漁師の舟入にもよき湊にて所にも大阪よりて
風景はよろしからす人の云ひけりし此浦より大手船を
乗りて七日向洋を渡り伊豫路よりまて此案内あるし
事ありしに日向灘ありし此海上そこにての此代々や
危ふき事の多かりし故に今は土佐の佐賀（の）あれは
此館船より此薩人の通ひといふ此みちのよき此旅館あり
事の云は浦より此中の高船は艘ども十艘にも及ぶ
其一文字に南海を越しきりて伊豆の下田浦に漕附
まれは十日のうちにみな皆着する事まて日和あし
かけれは五六日にもまさる事にて候しかるべき事な

かりさしてあるまじや但道の船路は毫ありぬものを
ふかく思ひはかる事なし
此地より唐人の渡る海上五百里といへる事もあり
小船にて唐人の渡るは古しへ此支國と称せし一西云
東西九里余南北五里七里或は二里或は一里宛所々
枚の本と申すへかりの本様腕ありし渡の風俗上世
のうち漸うく島人琉球のことく古昔の姿を残せり
琉球の風なりしとそ
此所の旅人薩摩へ来りても本国を禁して居住せるは浦にても
南久の渡海をして人と呼ぶ事なりし此風を呼んで
信しがたき事にて実に死せるを

西文の済ふ續では永良部島并里栗程度等のよく
熟せる所まて人家多し風俗西夷島のごとし竹ノ嶋も
其如く島数あれ共是は琉球に属し小嶋の名も
此方の浦人も急ぎ知らぬ事之叫ふる島を称せるもの
の硫黄沖の硫黄嶋又硫黄島など称して数々有て
朝しらいこのしまぞしらずや今是は硫黄の細る
する所にて後家役所事済も有るとさ事にて
浦人数人に尋ぬるに有しかども此の硫黄に栗壗
といふ所ある見本の事也し漁父の老人か云人云
しよりとて海を包見えよりも出なく是乃海に

うちに事之御禁もあれば硫黄までも一統せん
と思ひし事あるに目ぞこの為へ入らず海をさらし
立さて諸色の事有りし日向路より先近の浦に
為に相弘の食事に薩摩芋とさあくし小割して
食物に交へ食る事好まあらし所多し
薩州侯の御領下に入りては薩摩芋と琉球芋是にてしだし
如く芋を以て土地より作り出せるの中にかかる芋
有し此の利多くとありそれ故すから芋と作る村里
立いかやうの悪年凶年まで作物なしとも其のうぬ
事ありても飢渇のうきひ餓死せるなどいふ事有る
事なりしにつなき事といふ者のうちに行子芋
かけ目八百目さうへあれと細一石の三百斤程行子
定め 天明より計りつらおしとえらこつゞ銭

殊にまつりゆくへ秋より取りて二三年を経て元の如く
出来のよき年ハ一反を以三拾五貫目もとる事あり
不作の年といへども五百貫より二百貫目を下る事なく
種ハ芋八貫目にて三千貫目を生する事 是より
おしなへ地の利をとる事ハ外のものにハあるまじき也
一俵といふハ芋四貫目入にて一反より七俵も取るべし
其土地によるなりといへども耕作する人によつていまだやまし
荒れ畑の地面あしきにもよく生せるものにて百姓を
助る事この上なし 一歩之年ハ大麦等を作り一畝にハ生なる時
萎く死なきにもし それを能く作り 俵にいれて置
翌年もいつものく食せんと思ふ時ハ臼にてつき
粉にして小麦粟稗蕎麦其外雑穀の粉に交て
食物とし味ひあしからぬよし 其上百姓の常食にも
の為より初る事なれハ何国の人にもいかにも芋を
作りいかなるものゝ食ならんとて乱ことも無しく

下民には尊ぶべき至宝の救饑の草なり かく云説
よりも口過ぎ益を推し元南方の国よりもてくハ
おそらく此時の農耕の助けともならん 然ば百姓のため
にハしごき人に伝へ置小志也 書添之
琉球国なる島ハ海の乃漁家に入 甚しく尊
琉しを国とものにて海上の里数島と島との
海路もはるかにへだちたる故 地方より比せず
地方より沖のイラホ嶋までハ海上百二十里もありと云
何の島にて五豆小人をありて粟稗唐芋を作り
まゝに漁りを業とし 或ハ樹木を出し諸に船ありと
古も至らず此島人ハ地二其海世まても心安し 物ぬ

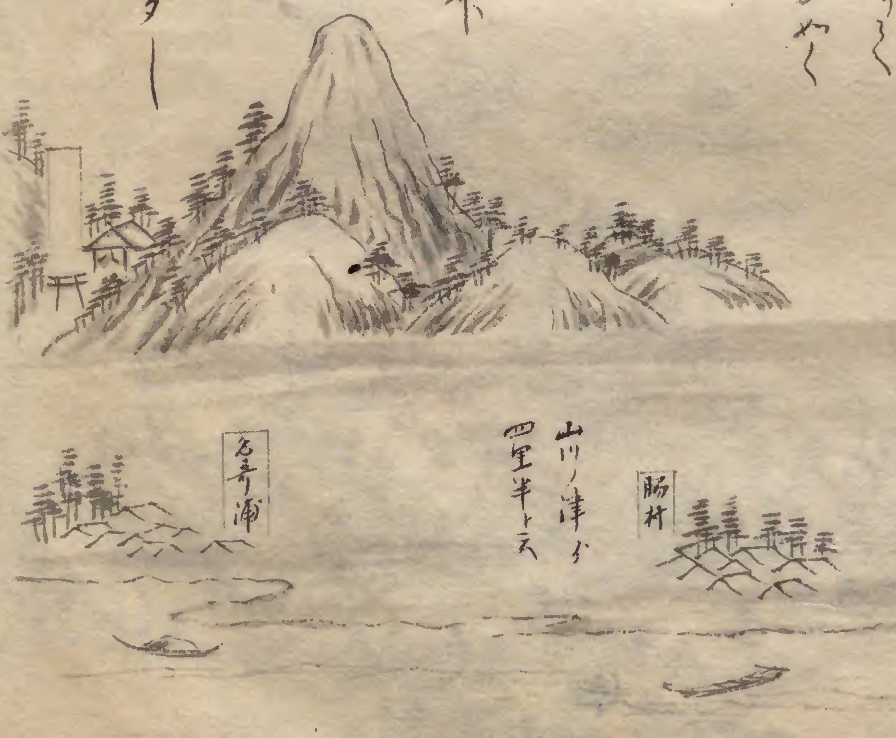
種子か嶋ハ大隅の属嶋にて方八里程の嶋といふ薩州屬也
且種子か嶋のうちしの土地之を宜しく此嶋ハ田所ハ
佗しからず山畑のみにて米の物を雜穀のみにても
其うちよく食物ハ自由にて外の諸品ニ至る迄自由なる
事といふ大隅の地方より海上十八里程といへり
日本のいふなりをもして幾里の海上にても十八里といふ例
通称とする時もなき国風なりとや是といふも平生より
しかる事故に世にいふ大監とは得よく濟する物
称ありし海内を行程の事を糺しく改め置くべき
ことの之卅六丁を一里の定法といふ事ハ誰も知る事
なるが國によりても定りし道法を称りて一里も
五十町あり五十丁より百丁までもある地多しし其所
是より田舎の村には一里といふ人のいふと行ま所

行く尋潮ても一里と数ふる処数多なりける近世の板なる
所中行程細見記と題せし道中記を推して諸國を
巡りし人多かりしに大違ひなる事多し 或伝説り
日本諸国とても廣大の國にて世界第一の上国也故に
中華より攻来らん事をおそれて態と小國と聞
ゆるやうに行程を縮め百里の地も五十里と云なし
に記せしものといへり 此説ハ埒なき事なれども
行程あやまりも不吟味なる事ゆへ了田といふ人と
それもなくて云ひ記る事にかり鳥亀説を
加へしものなる由し

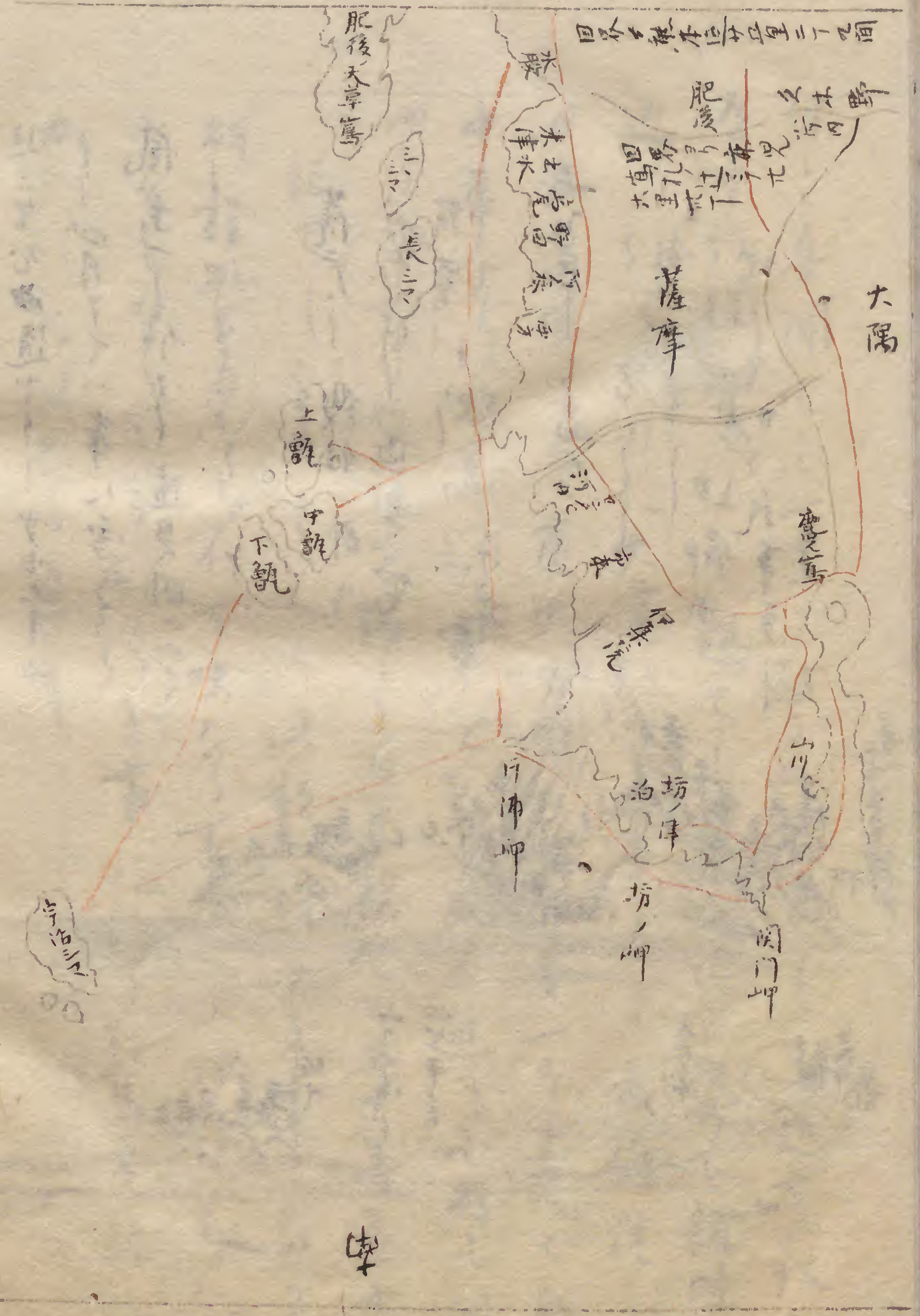
此山をとかヒモンが嶽と云へは御嶽とも
よし薩摩のうちにて殊に禁ずる頃さ
近三里なる曲道なりし 少しも九月比
より四月までハ峯に雪ありて
風景一しほよく遠見図のやく
やしに似たることハいふまでに

薩摩の頴娃の郡の
うちにて西是や
筑紫のうちにしは 舟

山とさして角の
名なりし
解しかたし
且部の
地しるくかられ事多し



南

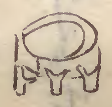


南

坊の津を辺鄙の地なる故に世に普く知られざる故にいと勝景
なる故なきにあらず本若年より山水に癖ありて
諸州をめぐりて風景の地ときけば見ざる所なきも
なく未だ松島をば一見せざれども丹後天の橋立
藝州厳島なとを見しに天の橋立よりも海面の
模様眺望広大にして島山の風景はいはんかたなく
いかなる画師も写し得る所なしと思ふなり
の松島を筆にて書かんとするも似たるやうにて
かかりし秋の月と称せる岩穴あるは雅石にして
きしかり見るより岩穴真丸く備はなく岩一つにして

同じからざれど海をまじへるも一石づつ異なるを思ひやるべし雅趣
石也双剣石と称せる数丈の岩（高サ未詳遠見五丈余もありし　何人ともえしれず石に竹生ぬ）
海面に竹と立しがごとし鵜瀬山を厳石山にて雑樹生じ
前後左右皆せし岩がきりなく並び立遠見鼻なる所
鵜瀬山真黒に見ゆる也此うへり鵜瀬山と号しや奇石の
山とりよーし弁天し祠昔不知なれども自然に岩石連り
並び東西にわたしたるやうになれり一乗院真言宗にて
大寺なるを行はされども風景の地にて遥か南の海上を
見わたせば数千里の大洋にして琉球に続きし小島縷々
見ゆるに近く見え名高き図をなす嶋の鴻目前にあるなり詠めゆ

立かつてんと唱ふるなり更に坊の津ハ此辺にての市中
にて倡家もかくまいしなりあるよし然しるに商船つきて之昔は
唐船蛮船着岸の津にて海上のつく方れ船入なりし此所
も御領主より他の琉球通の廻船なりて
琉球国は福州に相對して海上をへして遠ければ阿蘭陀其外に
唐船蛮船との間の海上を往来して長崎へ来る也此時東風
北風浪を越して日本の地にも寄るやかてやもしく琉球の
地に船をよせる事あり次第なるゆへに交易をも致す蛮
物唐物琉球より薩州へ渡る事也や鹿児嶋此地よりハ下ても
見るへし諸品あるき
水引新田宮に詣ふてんと坊の津をたちして河内に
行よ在道にて十里余上方筋と違ひて立家の茶店も

なくまれにも会やかに建しゆへに二間三間の居り家に
して大小もなしかつこれは勿論の事なりし膣国故に如
馬やうしやふを離れて家もかくのことくに造りて 床は
下をうちぬきにせしものにて家なりとも内なりとも農具
をさし入て置物置とせしものゝ他国にはなき家作り
なり馬やうしやの口には大木を横たへにして其
うちを操りて牛馬の喰ふをよの中にても大置事也
小便つかる圖のことくして一度すゝらぬ置を百年も
用ゆるゆへにふしぎのく此邊にて牛を甚だ好みて馬
多し其馬は大いなるを一匹もなくして佐駒のみなれ

見るに同し農具も上方とハ異なりしくめなれぬもの
多し
國中八分ハ山にして山なり押なへしてやうに山の頂き
平れる故にそれを切りさきて畑とし雑穀を作る事にて
食物とするしかし稀にも下民飢渇の難なき國也
國中より出る所の産物と聞しに藍（紺ハ深く染りて色よく他國にまさる）
多葉粉（ともに）海内第一 櫻の木（形の樽に製し諸國へ製するなり）杉（屋久の嶋と云 他國より至て上品）
桐 土布 中布（芭蕉布 麻布）（芭衣とする）黒砂糖 樟脳 此等ハ諸く
琉球の産物とかやしかし年毎あまり價となる所の金凡
十万両におよびぬと云人の自負する事也虚實ハ

知られさる所なくりて見る事ハかなはさりしき産物也
折から照らしと帯く農業をする百姓と見かくる事
あらし也人にいひての事ありやと尋聞しに百姓
の中にても家ある歴々と称するハ貧人にても其村
おりて其の百姓ならハ殿様にしられよなるよし
古風といふ色しやすい婦人のかせぎ男同様に農業
をせしむを國風なり
河内也と云所ハ紀町にて豪家も見へ商人も多き
所也さて此地ハ川を帯し山を背にして献とやく

にまれなり。秀吉公當國を征し給ふ一時島津家にて
頼とせし要害の切處なり 鹿児島ェ行程十三里といふ 志つかりをも
なし敗まりて終ニ島津家降参になりし其ゆへ
此地を降参場と云島津家ェ対して憚りしかバ也
地名の称號ゆへ不此邊の土人ら降参場といふ言を
過る旅人なとにハ不聞敷なりしかる里ありハ與へる
に渡し垂地名なりて旅人のこゝより降参場と戸
を旦との地なりと里人に尋聞し此所の事を告る
事也 實の説を幾年の後も人の口よ事なれ武門ハ
臆する働ハ死にかへても恥無き一大事と覚語あり

度ことの秀吉公ハ古今の猛将なりせよ峡嶇の切所と
数ヶ所にかまへ武備全き島津家の自国を数日なくて
して實の峡嶇かしこの切所もやすくと遠長に攻入
給ふ事不思儀の事に思ひしにおそらく是ハ宗門の
事也 當國往昔より国中おゐて門徒宗まて禁也
より入し門徒なる事秀吉公かねてしろしめされ
本願寺の同道なりて彼の親鸞上人真筆の六字
の名号を陣所に寄て征し給ひし故に一をあくの
陣将を初として寄ゆをぬせて心をなしてこれハ難な
名号を拝する事を涙を流し我先ニと其場へを

退陣せし故なりいつ人にもなし難くて嶋津家降参をなし
し事也それよりして嶋津領日向大隅当国隅〻端〻
までも門徒宗を呪詛して制禁なして他国にもくはしくきこえん
の吟味をもするに右法度強き故今を表じきいふなき
ゆへなれバ今も内やうにまもりて少しは左右にかたよるをもはなさき
のかくし念仏などは内〻ハ門徒宗といふと知りて
在〻にありくハ熊と土かまぬ顔つきして我〻実ハ真宗
なれども当国を一向宗ハ御法度つよく他国への縫く
よし聞及し故よ往来切手に書かへ浄土宗とかたく書
届とかしおとさいつえ家までもかくしたりとも馳走とし

留る事也と云へり今も虚実をしらん為に或武家に入り
右之通に物語りし本願寺の原かゝる記事を示しかバ是
家内うちより寄りくわんそうせし事なりきられしも宗門
におゐて甚き門徒なり今にても当国におゐては是
年毎に一人リ二人ハかゝる宗門の事にて刑せらるゝ者必ず
あるよしハ追放せらるゝ者を肥後ハ水股及び久木野に
行て居住する事多く薩摩国中より内〻にて宗門
の徒より渡世のなかしに金銀を集め合力をなし遣すと云
此一件何よりも馬鹿らしく定る虚説なりとなれバ
聞しにいゝ虚説なりとて忍としせんかたもないといふめり

忠の道〻と先ハ宗門わかれハア、おしてる盈し浮せいて

河内水引川をさして其の川ハはつかなる源を大隅ゟうつり
流しおるゝをもあつく薩州まで歩行渡りはよふ流るゝ川を
数多なる大河さへありなし、いかなる干魃年までも
水多き沢山より旱損ハかゝる國とて京楼に畑方七八分
うへし田方ハわつか二三分の國故に旱損のなき事に
思ひまし侍りし事也さて新田宮と称せるハ日向大隅
薩州三ケ国の一の宮にて社領千石社僧神主数多あり
祭神ハふきあへずの尊なりと神主ハいふ社地ハ
そのかみと見へしより上古の墳と見へ侍り此泉州境ハ
津に仁徳天皇の陵ありまして播州埜水といふあり

仲哀天皇の陵なり墳のかたちは大小こそあれ同しかた
をといへども上世人を葬むる製なりといへども
高貴の墳には必ず隧道あり此山にも隧道は
ありしかし今少し残りしは
国分寺も古跡と云人はいへども今は廃衰して小院と
なりし旧記に見るべき事跡はなし
高城村と水引との間に松の名木あり右エ遥に其
とされし六十余間に風俗播州曽根の松にも劣らず
さる松なれども誰も称誉する人もなく
他国へ出る事もなし辺鄙の地なれば其果

無し人の世に至るまでもかくのごとくなる事し
市来(イチキ)湊と伊集院の間に苗代村と云所あり此地に
朝鮮人の子孫数多住居せしときく侍りしが定めて
さて侍りなん面白き奇事もあらんと河内が一日路なれ
ば此所エ態々に行て委しく尋聞しに秀吉公
朝鮮は征伐の時より朝鮮人男女十余人薩州侯の領
分に渡りしを此所に置れしなりといふ事にしてや
年々に人数増し今此所に住せる朝鮮人の子孫
千五百余人男も女も髪をば頭頂にくくり
て曲げ琉球人の髪結しきしりして男もかんざしを

さしく居たりまて其人物をとくと見しに長も
高く面もおそろしく賤しからぬものなれども日本人
と縁語なる事を聞けば此法度にて天窗なりしも日本流
の月代天窓にせる事なりしを五七代も日本の地に住
居して八九分まで風俗になりし事故に天窗なりし
日本天窗に仕度しと度々薩摩侯に歎き願上し事
なれども御ゆるしなし今にも通辞役の者になりて
一家に二人扶持下され國の守の参勤の通行之節
ハ古例ありて御目見へをなして朝鮮人とも御諭しに
入らし事ハ此地ハ諸役の免地にて願ひ給ふ

あり此苗代に朝鮮より渡りし時に着し来りし装束を
持傳へて居る事なりし御目見の時も朝鮮装束にて
御前へ出ると云へり平生の業ハ世に薩摩焼と云
諸器の陶をなして渡世となし他國へ出る事ならぬ此地なり
なりし鹿屋村にて又云ふ朝鮮人住居
言語なども朝鮮言葉交りて母をアバ父をムマといふ
く此外知らざる言多し
西澗 西方氏書て より阿久根まで三里半海濱の荒磯を往来
其國の守の通行の街道なれども甚だ淋

此事ハある人云けらし薩州侯船にて参勤の山川の
津より京泊の沖を乗りまハし肥前長崎の西を巡り
玄界灘を越へ下の関より陸地を登りたまふ事なるを
かくの海上なりしとや
此辺の地方正面に当りて見ゆるハ中華福建省の
地と相対しく海上三百里をはなれし海面ハ図の
ごとくに盆のうつむけたるを並へしやうに岩石あつまりて
沖ぢりさうの荒き浪岩に砕く海上白く見ゆる事
漢東を見るに細長く岩の間をくぐりく漢李
とし鮑をすくふし鯨きもとこ名有るを剱へし

又ある年この国五島へも度々来りし船頭ありて山宿
せしかバ薩戸小大と称せる他国にならぬ小大此辺に多
し年々ハたまりしかバかくのごとく見ゆる大なり
観島と遠く見ゆる地方なり十二里（又云十三里 十四里）図のごとし
三島上観方四里下観方三里中観方一里とぞこれをこの
三島人々ハ島人疱瘡とせるゆへ地方渡りて疱瘡する
人をきらふてハたいらかなるゆへ帰る事まで稀なり
疱瘡とされハ島のうちへハ入れしく無難なり
疱瘡としても七十五日ハ忌嫌ひて帰る事をゆるさず
ところ日本の地にしてさへ疱瘡とせぬ所数ヶ所あり風ち

にあらざれ陰けハ陰けらるゝ病しや醫家に論
なき事し
阿久根より野田三里半野田より高尾四里高尾より
出水へ一り出水より米津へ一り此地ハ番所ありて往来を
改む肥後にいふ出水を初にいふある城ありて士家三
百軒ありて米津にも士十家ありときたし
肥後の堅めなる事し
六月十八日大隅より薩摩にのりて日の字薩州とさる
まゝく肥後国に入りし也
西遊雑記四之巻畢し

ごらへ平生に魚鰯
がらく浦人業とし
海底の岩石数多
なる中へ鰒を求
めんとなし
甲まと見ても賤女
人なりて男女
かもに裸身にて

言語もむしろ僻地いれんうきなし

阿久根より十町南に赤瀬村といふあり此所にて畑の
中より塩を吹出す事ありて塩を数斛あつめて塩を製
むかしと見しハ砂を畑の中へ一面にちらし置ハ
地中より塩を吹出して其砂につく事なりま 然
海塩といふ中土にあつめてこれを塩竈にて焚きて海
塩に同し塩とみえし 色灰白なり 味ハあしからす 中華にハ所々ま
山塩といふ所ありといへとも日本にてハ稀の地といふ
べし
阿久根大堅の津まて四五万石つみの大船ハかゝる所なり
琉球へ渡海所免の船もありて大坂中国へ通ふの廻船も

其外所々外国王萬も

大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan